慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	イエローフェイスにみるアメリカン・オリエンタリズム研究
Sub Title	A Study of the Yellowface in American Orientalism
Author	宇沢, 美子(UZAWA, YOSHIKO)
Publisher	
Publication year	2009
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2008.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究は20世紀前半のアメリカ演劇・文学における東洋人表象の変遷を扱い、従来はハリウッド映画との関係のみで論じられてきたイエローフェイスの営みを広くアメリカ文化全般に開くことを目的とする。舞台からラジオ、映像へと多ジャンルへ展開したイエローフェイスは異人種装による社会批評、実験演劇、政治プロパガンダと同時にそれに対するパロディをも準備する手法としてアメリカ文化の主要な文化作用を担った。
Notes	研究種目：基盤研究(C) 研究期間：2006～2008 課題番号：18520237 研究分野：人文学 科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_18520237seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１　年　　６月　３　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００６～２００８
課題番号：１８５２０２３７
研究課題名（和文）　イエローフェイスにみるアメリカン・オリエンタリズム研究

研究課題名（英文）　A Study of the Yellowface in American Orientalism

研究代表者
宇沢　美子　（UZAWA YOSHIKO）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：００１６４５３３

研究成果の概要：本研究は２０世紀前半のアメリカ演劇・文学における東洋人表象の変遷を扱い、従来はハリウッド映画との関係のみで論じられてきたイエローフェイスの営みを広くアメリカ文化全般に開くことを目的とする。舞台からラジオ、映像へと多ジャンルへ展開したイエローフェイスは異人種装による社会批評、実験演劇、政治プロパガンダと同時にそれに対するパロディをも準備する手法としてアメリカ文化の主要な文化作用を担った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	８００，０００	０	８００，０００
２００７年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
２００８年度	６００，０００	１８０，０００	７８０，０００
総　計	１，９００，０００	３３０，０００	２，２３０，０００

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：イエローフェイス，東洋人ステレオタイプ，ハシムラ東郷，　オリエンタリズム

１．研究開始当初の背景

本研究は、ウォラス・アーウィンとオノト・ワタンナという、二人の２０世紀転換期から前半に活躍した疑似日本人作家のアーカイブをひもとき、その同時代的かつ複合的な意味合いを探った二つの科研費研究（「異人としての日本人」課題番号 10610473、ならびに「アメリカ文学におけるに反黄禍論の源流」課題番号 13610584）に根ざしている。イエローフェイスとは白人俳優／作家による黄色人種の擬態／偽装をいう表現である。この営みによりいわゆる「東洋人」という現実のアジア人と重なりながらも、異なる人種ステレオタイプが生み出されてきた。ステレオタイプ論がステレオタイプな議論を繰り返してしまうことをさけるためにも、本研究につながる研究の中で、私は出版された資料だけでなく、未発表の原稿、草稿、書簡、自伝、写真資料などに目を通す方法を選んだ。そうすることでそれまでには注目されなかったイエローフェイスの個人的／社会的経緯を実証的に調べてきた。通俗文学においていかなるアジア人観が培われ、それが高尚文学、新聞ジャーナリズム、医科学、法律、社会風俗文化といったより大きなコンテクストに波及しうるものであることを実証的に示したのである。こうした地道な資料研究から私は当時アメリカでは知らないものがないほど有名な疑似日本人像「ハシムラ東郷」を発掘し、それをベースラインとして本研究へと発

展させた。

２．研究の目的

作家研究という形で収斂した先行研究を本研究ではさらに拡大し、演劇／ラジオ／文学をつなぎ、ハリー・ベンリモやエディ・ホールデンのような今日ほとんど忘れ去られている脚本家やパーソナリティを発掘し、彼らの仕事に光を当てる。それにより、アメリカ文化とう大きなコンテクストのなかでイエローフェイスという通俗文学演劇手法が担い、可能にした、（階級／人種／ジェンダーほかの）文化間の解釈や交通のありようを問うことを本研究は目的とする。

従来ハリウッド映画との絡みからのみ語られ、人種差別的なアジア人表象として一枚岩的に捉えられてきたイエローフェイスだが、その異人種装の営みは古くかつ複雑である。本研究は１９世紀末から２０世紀前半のアメリカを扱い、この時期のイエローフェイスは便宜上、二つの潮流に大別する。一つは異国情緒あふれるロマンティックなアジア表象の一環としての異人種装、もう一つは階級差に根ざした社会批判の道具としての異人種装である。質においてこの二つのイエローフェイスは両極を成す。前者がいわば情の技法であるなら、後者は知／ないしは理の技法なのである。

前者のイエローフェイスはアメリカ舞台演劇が、デイヴィッド・ベラスコという敏腕演出家を得手豪奢に審美化し、またアメリカが環太平洋地域の覇権として時代の寵児にのし上がった時代に、舞台の上でアメリカの威信を文化的につくりだし、支持するために展開された「アジア」像の一環をなした。またジェンダーがそこに意図的に導入されることで女性的なアジアを仕立て上げる結果となった。ベラスコに関してはすでに良質の先行研究があるが、本研究はそれをふまえた上で、ベラスコの舞台化した豪奢なアジアに学んだ演出家脚本家のなかでも、特にハリー・ベンリモに注目する点で特異性を持つ。というのもベンリモは彼のつくりだしたイエローフェイス演劇のなかで情と理の技法を合体させたからである。ベンリモに関してはアメリカにおいても未だ本格的な研究はなく、本研究が嚆矢となる。通俗円的から親米的なモダン演劇へ、イエローフェイスの歴史を文字通り生きたベンリモの仕事をあとつけることで、ハリウッド以前のイエローフェイス史を具体的に提示できる。

今ひとつのイエローフェイス伝統である社会批判の道具としての東洋人像は、１９世紀の通俗演劇ミンストレルシーの流れを汲み、新聞コラムニストとして２０世紀の一時期に一世風靡したウォラス・アーウィンのハシムラ東郷をその典型とする。この東郷の後継者として本研究は、白人声優（俳優）エディー・ホールデンの演じたラジオ・パーソナリティ「フランク・ワタナベ」を取り上げることで、社会批評メディアとエンターテイメントの複合を再評価する。

３．研究の方法

アーカイヴ所蔵の資料に基づく実証的な研究方法をとった。特にニューヨーク公共図書館蔵のハリー・ベンリモ資料、ならび同図書館所蔵のデイヴィッド・ベラスコ資料を使用した。

また本研究はベンリモについては、豪奢なアジアを舞台に花咲かせたベラスコとの比較研究、ラジオドラマ「フランク・ワタナベとアーチー様」については、ウォラス・アーウィンのハシムラ東郷コラムシリーズとの比較研究を行った。

４．研究成果

（１）　デヴィッド・ベラスコが２０世紀初頭のアメリカにおいて舞台上に開花させたアジアは、さまざまな細部に「日本」らしさをちりばめ、衣装や立ち居振る舞いに関して日本人の助力を得たにもかかわらず、やはり一大虚構の「東洋」に近しい存在であった。舞台美術に美術工芸のジャポニズム流行を採用し、その異国情緒の豪奢さは聴衆にため息をつかせた。が舞台の上に幻出したのは現実のアジアとは似て非なる非在の国である。ベラスコの「日本」は同じ「東洋」を舞台や題材にしたとはいえ、後のハリウッド映画の通俗性とも、同じくらい非在の日本を演出しながらもイギリスで一世風靡しアメリカに輸入された『ミカド』の滑稽さとも、一線を画し、「審美主義のアメリカ」を前面に押し出した脚本、演出、衣装、広告から作りなされたものであった。

ハリー・ベンリモは、このベラスコのもとで演じ学んだ、イエローフェイスの俳優・脚本家・演出家であった。彼はもともとイエローフェイスのもう一つの流れである、１９世紀の通俗演劇形態ミンストレルシーで東洋人をもっぱら演じる端役の役者であった。ベラスコの目に偶然とまり、ニューヨークにきて、ベラスコの演劇作品に複数役をもらううちに、１９１０年代には前衛的なイエローフェイス作品『イエロー・ジャケット』を世に問うことになった。自らの出自に関して、ムーア人の血を引く、いやアジア人の血を引く、などと様々な噂を流し、大衆の興味関心を煽り、実人生上も、半分は自作品のプロモーションのためだったが、イエローフェイスで生きた。

ベンリモの出世作『イエロー・ジャケット』は愛する子供のために自己犠牲する母という主題をもち、その点ではベラスコの『蝶々夫人』、『神々に愛されし者』などの東洋ものの路線を踏襲する。が、同時に京劇の「検場」に由来する「道具係（property man）」なる登場人物兼演出家兼批評家である黒子を舞台に登場させた。この役柄は舞台の表にたつ裏方という逆説的存在である。目に見える存在でありながら、設定上は聴衆に見えないことになっている黒子である。舞台の上で進行するドラマに対し常に距離をもち、時としてその扇情性を茶化しながらも、シーンごとに舞台の上で同じ形のいすと机を組み直すことで文字通り舞台を作る係でもある。このきわめて自意識かつ実験的な道具係の導入により、ベンリモの『イエロー・ジャケット』は、ポストモダン時代のメタシアターにもつながる、イエローフェイス演劇の新しい地平線をきりひらいた。

（２）娯楽と社会批判の共存は、１９０７年に新聞コラムニストとして登場した疑似日本人キャラクター、ハシムラ東郷の仕事を典型とする。１９１０年代にその頂点に達した東郷の社会批判は、日本人学僕という人種、階級、ジェンダーによって重層的に決定されたキャラクターの特異性に負う。文化的に無知な異邦人でありながら、地に足をつけた家内労働者ならではの具体的な視点、男でありながらも女性化される存在であったため、（白人）男性と（白人）女性の「分離された領域」を媒介し、互いに互いの批判の鏡とすることも、共感を模索することも、両者をともに笑いの的にすることもコラムのなかで実践した。

この娯楽とアメリカ文化批判を複合した東郷の後継者として本研究が注目したのが、白人声優エディ・ホールデンの演じたラジオ・パーソナリティ「フランク・ワタナベ」である。１９２０年代後半から３０年代にかけて人気を博したラジオ番組「フランク・ワタナベとオナラブル・アーチー」の登場人物である。録音が現存する１２話分を検討した結果、明らかにこの白人声優が声で日系アメリカ人を演じるプログラムは、ウォラス・アーウィンのハシムラ東郷同様、耳に働きかける作られたエスニック・アクセントによる笑いを基本としている。と同時にこの疑似的日本語英語アクセントは、もう一人の主人公であるアーチーの英国なまりと競合し、むしろアーチーをこそ笑いの対象とする。ストーリー全体も、恋に突き進み山ほど馬鹿な行為に及ぶドンキホーテであるアーチーを中心に進むが、それを支えながらも批判的距離をとるサンチョ・パンサとして従者フランク・ワタナベは存在しており、その外のアメリカ社会に対する文化批判というところまではいかない。むしろだからこそ、フランク・ワタナベのイギリス（なまり）を笑うという態度は逆にアメリカ的な娯楽となり、エディ・ホールデンが白人声優であることが了解されてはいても、依然として日系二世の間に絶大な人気を得たことが理解される。ホールデンは実際、アメリカ西海岸の日系の祭りに招かれるほど、日系から受け入れられていた。第二次大戦下、日本側が「東京ローズ」らをつかって太平洋のアメリカ軍にむけ、戦意喪失を狙って日本側が英語放送したのも、この「フランク・ワタナベ」のプログラムであった。

（３）第二次世界大戦前後、ピューリッツア賞作家であるジョン・Ｐ・マーカンドは、日本人諜報部員ミスター・モトの連作を著した。マーカンドの紡ぎだした日本人像は必ずしも大戦中の「敵の顔」ではない。モトは怜悧冷徹ではあっても非人間的なイメージを持たない、戦前戦中戦後を通して存在しうる写実的な人物像である。また、ハリー・ベンリモのメタ演劇的存在「検場」と相似する立場を小説中とる点でも、一枚岩的な「敵の顔」とは異なる。人間的深みを欠く人種ステレオタイプにはかわりないものの、モトはアーウィンのハシムラ東郷の変異体であり、マーカンドとアーウィンの間には、発表媒体、経済破綻の経験、階級差を軸にする批判精神を共有した。

第二次大戦中、マーカンドはモト連作を中断した。一方アーウィンは東郷連作を発展させる文章（未発表）を残した。「日本人学僕、栄光の戦地へ行く」「日本人脱走兵の手紙」「アンクル・アドルフとマック東郷」と題された文章が、カリフォルニア大学バークレーのバンクロフト図書館のアーウィン文書のなかに含まれている。これらの未発表の原稿を分析することで、アーウィンはマーカンドとは違うが、サンチョパンサのフランク・ワタナベを分化させる、二方向でハシムラ東郷の延命を模索していたことが了解された。一方では悩める人間として、もう一方では笑いと批評の武器となる道化の人形として、アーウィンは戦時下のアメリカの常識に対する懐疑精神を東郷に体現させていたのである。この点については、南山大学で開かれた日本アメリカ学会サマーセミナーに於いて発表し、それを論文として出版する機会を得た。またマーカンド論以外の部分については、拙書（単行本）『ハシムラ東郷—イエローフェイスのアメリカ異人伝』に成果をまとめ、東京大学出版会から出版した。本書は２００８年１１月１５日づけの朝日新聞夕刊の文化ニュース欄において、「架空の批評家ハシムラ東郷」のタイトルで取り上げられた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）
① Yoshiko Uzawa, “Hashimura Togo Went to War: Yellowface, the Yellow Peril and Philosophy of ‘Poppaganda.’” Nanzan Review of Amerian Studies, vol.30, 189-202, 2008, 査読有。

〔学会発表〕（計　２　件）

① Yoshiko Uzawa, “Hashimura Togo Went to War: Yellowface, the Yellow Peril and Philosophy of ‘Poppaganda.’” Nagoya American Studies Summer Seminar: Literature and Culture; Workshop I; Nanzan University, Nagoya, 2008/07/27.

② 宇沢美子、「ハシムラ東郷−イエローフェイスのアメリカ異人伝」、日本アメリカ文学会東京支部、 於慶應義塾大学、2008/05/07。

〔図書〕（計　１　件）

① 宇沢美子、『ハシムラ東郷ーイエローフェイスのアメリカ異人伝』東京大学出版会、２００８年、２９４頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
宇沢　美子（UZAWA YOSHIKO）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：００１６４５３３

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし